

『少年工科学校物語』

武山やすらぎの池の絆
(桂儀一光著) を読んで

葛原 和三 陸自74

今なお、自衛隊最大の訓練事故といわれる少年工科学校生徒の殉職事故から50年が経過した。その事故とは、昭和43年7月2日、区隊長、田村勇1等陸尉(当時)の指導する第12期生(3学年、1等陸士)78名の戦闘訓練において、折からの豪雨の中、やすらぎの池で渡河訓練を行い、13名が水死した事故である。

昨年、50回忌の命日、高等工科学校(かつての小年工科学校)では滝澤学校長(第24期生)のもとで岡部陸幕長、地元横須賀の小泉進次郎議員らを迎えて学校を挙げての慰霊・顕彰行事が行われた。当時、17・18歳の少年だったが、今では初老となった同期生100名とその家族30名、ご遺族30名が後輩たちの見守る中、参列した。

私たち第12期生は、これまで自衛隊殉職隊員追悼式のご遺族との交流、現地慰霊、みたままつりなど年3回の集まりを重ねてきたが、行事後、慰霊碑のある池の周辺で「遺族の質問に答えたのは初めてだった。訓練に参加し

ていた同期生から事故時の状況を彷彿とさせる説明が行われた。

当時、ごった返していた池の周辺では、我々生徒も捜索に加わり、次々と引き上げられる同期生に人工呼吸や、担架搬送を行っていた。私も現場にいて、半裸で膝を屈して男泣きする区隊長が「ここで死なせて下さい！」と生徒隊長に嘆願し、隊長は「何をいうか、これから君はやらなければならぬ」とがたくさんあるんだ！」と烈火の如く叱咤していた情景が思い出された。

そして学校行事終了後は、横須賀のホテルでご遺族との懇親会を行い、全員で肩を組み、校歌を歌う頃にはうち解けた一体感が得られてきた。

この節目にあたり本書『少年工科学校物語 武山やすらぎの池の絆』が刊行された。この刊行を最も熱心に進めたのは、同期生から最も信頼されている稲村孝司同期生学生会長だった。会長は、当時の国語教官に執筆を依頼し、その桜井教官が教え子の中から作家の桂儀一光氏(第7期生、本名・合澤八千穂氏)を推薦した。そこで託された桂儀氏が、熟慮の末、主人公としたのは、殉職した生徒ではなく、区隊長その人であった。

学校から半年後に刊行された『殉職生徒追悼録』には、事故の経緯とともに同期生一人一人を偲ぶ同期生や後輩

の言葉が寄せられており、今となってはこれ以上の追悼録は出来ないと思われる。だが、この追悼録には、事故の核心といえる区隊長に関する記事がほとんど記載されてなかった。また、これまでの同期生会でも、誰も区隊長のことは話題にしなかった。

しかしながら、誰一人として区隊長の生徒に対する愛情と、訓練に対する熱意を疑うものはいなかった。刑期を終えた区隊長が13人の実家を訪ね、遺族に詫言っていたことも知っていた。だからと言って区隊長に対するわだかまりは、消えたわけではなかった。

私もその一人であったが、この本を読んで考えが少しずつ変化してきた。区隊長のその後の半生がいかに辛いものであったかを、この年齢になってようやく実感できた。つまり、半世紀の年月を経て区隊長を受け入れるべきではないかと考えるようになった。そう思えるようになったのにはもう一つの理由があった。

殉職した生徒の中でも最も強靱な精神力、体力、そして実行力を持っていたのは、生徒会副会長であり、ラグビー部の主将であった亀川正生徒である。青森県出身で、実直そのものであった彼が、区隊長に惹かれ、憧憬し、区隊長のような自衛官になることを目標にしていたことを本書を読んで初めて

知った。

このことから、亀川君が事故の当日、先頭を泳ぐ区隊長の後に付き従い、そして一旦は岸にはい上がったものの、まわりの制止も聞かず、再び入水し、水死した行動に繋がるのが確認出来たからである。その亀川君が慕っていた区隊長とは、いったいどのような人物だったか、本書はその区隊長が育ってきた時代を遡っていく物語でもある。本書の内容は大きく三つに区分される。第一は、どのような経緯で区隊長となったのか。第二は、なぜ、雨の中の渡河訓練を強行したのか、第三は、刑期を終えた区隊長がその後の人生をどう生きたかである。

よってこの本は、区隊長と生徒との心の交流がメインストーリーとして丁寧に描かれており、さらにサイドストーリーとして、区隊長と幹部候補生学校以来の同期で英語教官であった小田嶋教官との友情が描かれている。人生で最も窮地に陥った時、区隊長を支えていたのも同期生だったのである。

この他、昭和30年代の自衛隊や、少年工科学校を取り巻いていた時代環境が克明に描かれており、いわば、傍流の自衛隊史としても意味を持つといえよう。

改めて、亡くなられた13名の仲間のご冥福をお祈りする。